

朝に道を聞かば -立教 23 年の個人史-

実松 克義

筆者は過去と思い出が嫌いである。それなのにこれから過去の思い出を書こうとしている。その矛盾で軽い自己嫌悪に陥りそうである。何故なら時計はまだ止まっていないからである。過去の思い出を語るとは、人生の最後にすべき行為のような気がするからである。だから思い出の文章はこれまでほとんど書いたことがない。だが全カリでは慣習として、毎年退職する人に、何か感想を書いてもらうのだという。去りゆく者へのありがたい配慮であろうが、この依頼を引き受けた後、実際に何を書こうかと迷った。全カリの基本理念とその設立の経緯を述べようかとも思った。あるいはこれまでの総括をしようかとも思った。だがそんな大上段に振りかぶって深刻なことを書いても、結局は時代錯誤的な老人の感想にすぎないだろうし、もはや誰も賛同する人はいないだろう。そう思ってすべてをあきらめた。代わりにここでは本学に着任してからの教員生活を中心に、筆の赴くままに升目を埋めてみたいと思う。

筆者が立教大学に着任したのは1990年4月である。まだバブルが崩壊する前で、海外ではソ連が解体し、ベルリンの壁が崩壊する等、世はまさに激動の時代であった。今から23年前のことであるが、そうしたことから、その時この大学にこれほど長い期間在職することになろうとは思ひもしなかった。次は何が起きるのだろうと思ったのである。だが予想はまったく違っていた。よほど居心地がよかったのだろう。気が付いてみれば、四半世紀近くが過ぎ、当時まだ紅顔の中年予備軍であったはずの筆者は

すっかり老いさらばえてしまった。まさに「光陰矢のごとし」である。過ぎ去ってみれば、一瞬の出来事のようにも感じるが、振り返るととても長い時間であったように思う。その間に立教は変わった。キャンパスも、教職員も、また学生も。クリスマスツリーと一号館付近を除いては、昔の面影を残している場所はほとんどない。

この23年間に筆者は一般教育部（及び一時的に大学教育研究部）、社会学部、そして異文化コミュニケーション学部の三つの学部を渡り歩いた。それぞれの時代に思い出があるが、そのいくつかをいまから綴ってみたい。

一般教育部では英語科というところに所属した。「英語の立教」を代表するそうそうたる英語の大先生が集まった伝統ある学科であったが、新顔は発言を憚るような雰囲気のところ、正直に言ってあまりよい思い出はない。これは当時の一般教育部全体にも当てはまるだろう。その意味で大学全体がやがて再編成されたのはよいことであった。

この時代の最大の出来事はやはり全カリであろう。当時の本学のカリキュラムは、他の平均的な大学と同様、古色蒼然としていた。1991年に文部省の「大学設置基準の大綱化」が発令され、それを機に全国で大学教育の改革が始まった。立教でも1993年あたりから各所で改革案が出され、1994年初めには準備委員会が設置された。本学が目標としたものは「リベラルアーツ教育」の実現であった。そして同年12月に全学共通カリキュラム（いわゆる「全カリ」）運営セン

ターが発足する。その新組織において、どういう縁かは知らないが、筆者は言語教育科目の責任者を任されることになった。

その後の2年数か月の間、今から考えると「疾風怒濤」というか、天と地が引っくり返るような生活が続いた。全カリの組織整備、制度改革、新カリキュラム立案、新任人事、そしてインフラの準備がほぼ同時進行で行われた。ほとんど毎日11時頃まで会議があり、時には電車が無くなってタクシーで帰る人もいた。思えばよく働いたと思う。ある時全カリ運営委員会で言語教育科目の非常勤人事（現在は兼任人事）があり、四十数名をまとめて提案したことがある。さすがにこの時は履歴書を読んでいて嫌になった。こんなことは前にも後にも前例のなかったことではないだろうか。とにかく会議だらけであった。会議のない時は、会議の準備や打ち合わせがあり、その合間を縫って授業に行くとホッとしたものである。

今から考えると全カリは一種のお祭りであったのかもしれない。日本民俗学に「ハレとケ」という対照概念があるが、全カリはおそらくは数十年に一度の立教大学の「ハレ」の機会であったかもしれない。1996年12月、また1997年4月に開催されたFDセミナーはそのお祭りの熱狂を伝えるものであった。いずれにしても、3年の準備期間を経て、1997年4月に本学の全学共通カリキュラムはスタートした。全カリはそれまでの大学教育の方法を根本から変える教育改革であった。それは本学の学生にとってすばらしい福音であったにちがいない。このカリキュラムが実現したのは、多くの教員、そして職員の一致団結した献身的な協力のおかげである。

全カリへのコミットが一段落したあと、筆者は社会学部に移り、同時に1年間の研究休暇をもらった。この1年間に、

筆者は南北アメリカを歩き回ってフィールドワークを行い、本格的に各地の先住民族文化の研究を始めることになる。

筆者が本学に着任したのは英語を教えるためである。全カリへの関わりも、英語教育を通してである。しかし筆者はまた、以前から人類学、民族学、宗教、シャーマニズム等に関心があり、すでに1990年代初期から、休暇を利用して中米のメキシコ、グアテマラ等でフィールドワークを行っていた。当時の筆者の関心はマヤ先住民族の宗教文化で、1998年にはグアテマラ、マヤ・キチュー地方に長期間滞在して、本格的な調査を行った。またマヤの調査が一段落した後、筆者の関心は南米へと向かい、1990年代終わりにはアンデス地域でフィールドワークをするようになった。そうしたこともあり、社会学部に移籍した後、英語の科目に加えて、民族文化論の講義と宗教人類学のゼミを受け持つようになった。また自分と研究分野が重なるラテンアメリカ研究所の運営にも関わるようになった。

社会学部には、本学在職中最も長い、9年間在籍したが、とても静かな期間であったと思う。おそらくその最大の理由は全カリ関係の教員が学部の要職から免除されていたためである。その寛大な配慮に改めて感謝したい気持ちである。同時にまた全カリそれ自体もすっかり軌道に乗って安定飛行に移り、もはや筆者の出る幕ではなくなった。そのためであろうか、この期間は大学に関係した「これは」という思い出が少ないように思う。

むしろこの期間筆者は大学の外で研究活動を行うようになった。2000年代初め、筆者はフィールドワークのためボリビアを頻繁に訪れたが、ボリビアの北東部、モホス大平原に知られざる古代文明があることを知った。この地域はアマゾンの上流地域であるが、ジャングルではなく、広大な面積を持つ氾濫原であ

る。この特異な地域には無数の古代の道路、運河、人造湖、農地跡等が残されている。筆者は様々な経緯を経て、この未知の文明を解明する日本とボリビアの共同発掘プロジェクトを立ち上げるようになった。プロジェクトは2005年に開始され、5年間の調査の後2009年に終了した。プロジェクトの実施には、全カリの創成期とはまた違った、幾多の困難が待ち受けていた。極度に忙しい日々が数年に渡って続いた。しかしそれも何とか終了し、2012年夏に最終報告書を提出してすべてが完了した。

さていよいよ大学生活最後の期間が訪れる。2008年4月に異文化コミュニケーション学部という新学部が創設され、筆者はそこに移籍することになった。この学部に移って、筆者は初めて本格的に専門教育というものに関わるようになった。この学部においても、(おそらくは老齢への配慮から)学部内要職から免れたため、非常に静かな時間が流れたが、あらためて大学教育の難しさを知ることになった。この5年間筆者は文化人類学、比較宗教学(宗教と社会)、フィールドワーク、専門演習、卒業研究指導演習等の科目を担当してきたが、現代日本の大学において優秀な人材を育てることがいかに大きな課題であるかを痛感した。それは教員の研究、問題意識を若者である学生の関心、ニーズと一致させる作業であり、最後には学問とは何かを問いかけることでもあった。

異文化コミュニケーション学部は全学共通カリキュラムの資産と多様な人材を基に設置された学部である。この学部はとても若く、様々な意味で未完成である。だが大きなポテンシャルを秘めている。その意味で、学部として小さくまとまらず、大きく飛躍してもらいたいと願っている。

以上、とりとめもなく立教大学における教員生活を述べてきたが、最後に印

象に残った担当科目をいくつか挙げて終わりたいと思う。

遠い昔のことなので記憶が定かではないが、思いつくままに述べると、やはり全カリ創成期に担当したクラスが最も印象に残っている。例えば、全カリの英語カリキュラムがスタートする前に、旧カリの時間枠を使って新カリキュラムの予行演習をしたクラスがあった。また新カリのスタート後に毎年教えていたインテンシブ・コースがあった。この頃のことは学生の真剣な授業態度とともに今でも蘇ってくる。未だに網膜に焼き付いているが、彼らの目は輝いていた。その後長い間全カリのクラスは例外を除けばそれほど強い印象はなかったが、最近全カリのリバイバルとも言える副専攻クラスが始まり、昔の記憶が蘇るのを感じた。例えば、去年、今年と教えたレクチャー&ディスカッションはそうした過去のフラッシュバックのようであった。

専門科目の分野では、社会学部時代の記憶が鮮やかである。例えば民族文化論は2004年から3年間教えたが、当時ボリビアで進行中の筆者のプロジェクトがテレビで放映されたこともあり、ある年は125名もの履修者があった。また2002～2004年度のゼミが記憶に残っている。このゼミは男性のみ5人のグループであったが、2年半に渡り宗教とは何かについて討論し、学生の中に強い絆を作り上げた。異文化コミュニケーション学部の時代になって、専門教育は日常と化した。起きたことがあまりに現在に近すぎるため、遠近法的に見ることができないが、すべてよい経験であったと思う。

教育とは結局は教員と学生間の「心のやりとり」であろう。そしてこの交換の根底には知識に対する愛が不可欠である。マヤ・キチエー語において、叡智、知恵はナワール(Nahual)と言うが、これはクナワッシュ(K' nahuax、知る)

という動詞から来ている。学ぶことの本質がここにある。人間は一生学び続けなければならない。何故ならそれが人間としての宿命であるからである。翻って大学とは学問をする場所である。日本語において、学問は「学んで問う」と書く。本学の学生がこの学びの舎において人間としてさらに成長することを願い、筆をおくことにする。

さねまつ かつよし
(本学異文化コミュニケーション学部教授)